

初級クラスでの神経言語学的なアプローチの導入の試み  
AN ATTEMPT TO INTRODUCE THE NEUROLINGUISTIC APPROACH IN THE  
BEGINNER CLASS



<https://doi.org/10.24412/2181-1784-2022-22-158-161>

**Pak Olga Dmitrievna**

筑波大学大学院生 Graduate student, University of Tsukuba  
M1, Master's Program in International and Advanced Japanese Studies  
Graduate School of Business Sciences, Humanities and Social Sciences  
olga.pak.uz@gmail.com

### ABSTRACT

*The most widely accepted approach to the process of second language learning in the cognitive process is the proposal of Anderson (1990) and DeKeyser (1998). It has been pointed out that this explicit teaching approach caused various problems such as grammatical operation (Watanabe, 2019). In the neuro-linguistic approach, language is not learned as knowledge, but through practice of language use (Paradis, 2009). In this study, we consider the contribution of neuroscience research to solving grammatical operation problems in second language learning. The purpose of this paper is to show how the discovery of neurolinguistics can help us understand the complexity of learning second language. This article describes a research project carried out with a group of nine international students at the University of Tsukuba. We present results of the practice of conversation instruction in the beginner class of Japanese language. Based on the principle of the neurolinguistic approach, we present what kind of grammar items students had already learned can be used as a model conversation, and practiced both one-to-one methodology and the group work in the class. By giving this kind of guidance, the students became more active in speaking. The results of the practical application of the neurolinguistic approach show the importance of neurolinguistics teaching methods in improving second language learning.*

**Keywords:** Second Language Acquisition, Neurolinguistic Approach, internal grammar

#### 1. はじめに

第二言語習得 (Second Language Acquisition) の研究が盛んに行われるようになってきた 1970 年代から 1980 年代にかけて、第二言語習得は主に学習者個人の中で発生する認知過程とみなされていた。認知過程を理解するためには、まず第二言語習得における明示的知識と暗示的知識という 2 つの概念の説明が必要だと考えられる。明示的知識とは、言語のしくみ、文法規則、語彙に対する意識的な認識のことである。それに対して、暗示的知識とは、第二言語を自発的に使用する能力のことである (Germain & Netten, 2012)。

第二言語学習の認知過程のプロセスについて最も広く受け入れられているアプローチは、Anderson (1990) と DeKeyser (1998) の提案であり、学習は 3 つのステップで行われるというものである。すなわち、まず、言語に関する知識 (語彙、規則、活用) を学習することである。次に、演習を通じてその知識を固めることである。最後に、知識を伝達活動で使用するために転送することである。つまり、明示的知識は実践を通じて暗示的知識になるということである。

このアプローチが学習の形態に焦点をあててきたことで、文法運用といった様々な問題を引き起こしている事も考慮せねばならないという指摘がある (渡邊, 2019)。

一方、神経言語学的アプローチ (Neurolinguistic Approach) の理論においては、明示的知識は暗示的知識に「変換」されないという主張があり、言語を知識として学ぶのではなく、言語使用の実践を通して習得するという考えのもとにした研究が増えてきている (Paradis, 2009)。

Morgan-Short et al. (2010) は、言語理解の検査に電気生理学的技術を使用し、次の研究を行った。参加者の第二言語のレベルにかかわらず、学習者を 2 つのグループに別け、明示的または暗示的な指導を行った。その研究結果は、暗示的なグループが名詞と形容詞、および名詞と冠詞の一致についてネイティブのパターンを示したため、暗示的な指導に利点があることを示唆している。一方、明示的なグループは、名詞と冠詞のみを一致できたので、明示的指導は効果的ではないと述べている。さらに、第二言語のレベルが高い被験者には、第二言語の文法処理が第一言語の神経認知メカニズムに依存があることを明確にしている。一方、第二言語のレベルが低い参加者、第二言語の文法処理は明示的メモリと意味処理メカニズムに依存するようである。

すなわち、ネイティブのような言語能力を身につけるために暗示的な指導は効果があると言える。また、第二言語のレベルによって、明示的または暗示的な指導の効果が異なることが認められる。第二言語のレベルが高い場合は、暗示的な指導で成果を期待する。第二言語のレベルが低い場合は、明示的な指導と暗示的な指導の組み合わせは効果的な指導方法になると考えられる。

本研究で対象になる学生は、初級レベルの日本語学習者であり、つまり第二言語のレベルが低い学生であるため、明示的な指導と暗示的な指導の組み合わせたアプローチに基づくことを効果的な指導法だと考えられる。

神経言語学的アプローチは明示的な文法学習と暗示的な文法学習の組み合わせたものであり、その教授法の原則を以下にまとめる (Germain & Netten, 2012)。

- 1) 「暗示的言語能力」の養成
- 2) プロジェクト学習の実践、形より内容を重視する
- 3) オーセンティックな (本物の) 会話場面の創造
- 4) インタラクティブなやりとり
- 5) リテラシー (言語に関する知識ではなく、言語を使いこなすスキル) の養成

本稿では、形式ではなく、内容を重視する神経言語学的アプローチを採用しつつ、既習の文法項目を用いて、口頭スキルの向上を目指した授業の実践報告である。

## 2. 授業概要

本稿は、筑波大学国際日本研究専攻の「日本語教師養成プログラム」の一環として行った教壇実習結果を報告するものである。筆者は、初級レベル日本語学習者を対象にした英語プログラムの日本語のクラスにおける実習の取り組みについて述べる。

筆者は見学していた授業は「学群英語プログラム日本語 (Japanese 101)」であり、週 3 コマ、10 週間 (10 月上旬 - 12 月下旬) の授業である。英語で学位を取得するための学群英語プログラムの留学生を対象に開講される日本語科目である。ひらがなが読めることおよび書けることは、クラスの前提条件であり、授業は英語で行われる。4 レベルの習熟度別クラス編成で日常生活に必要とされる日本語から中級の読み書きまで、4 技能 (話す、聞く、読む、書く) を養成することを目標とする授業である。

外国人留学生の中、学部生を対象とし、授業登録者の人数は 9 人である。出身は、ネパール、カザフスタン、シリア、台湾、中国、ドイツ、マレーシア、バングラデシ

ユ、インドネシアである。各国のインターネットの接続は多様であるが、本授業は ZOOM を用いたオンライン同期型の遠隔授業として行われた。

### 3. 指導の枠組み

日本語には多様な文の類型がある。判断文、疑問文、命令文以外にも各種の文の類型を列挙することができるが、これらの文は肯定的か、それとも否定的かのどちらかに分類される。つまり、日常生活のなかで使っているあらゆる文は肯定文か否定文であるといえよう。このように言語表現としての否定文は肯定文と対立関係にあるが、文法的なカテゴリーとしての肯定と否定においても同様で、高橋太郎 (1987) は「日本語の動詞はみとめかたのカテゴリーにおいてみとめ (肯定) の動詞とうちけし (否定) の動詞が分化している」と述べている。

本授業の主な目標として、学生に現在肯定形の名詞文「～です」および現在否定形の名詞文「～じゃありません」を使ってもらい、会話における自然な自己紹介をしてもらうことである。この目標を設定した上で、神経言語学的アプローチの口頭スキルの指導原則に基づいて、以下のように練習問題の条件を設ける。

まず、第一に、会話の本物の状況に適応させながら、学習者に作成してもらいたい言語構造のモデルを提供することである。その文の構造を明示的にパワーポイントで提示することはなく、絵を見せながら既習の文法を思い出させる。そのため、すぐに発言してもらいたいことに応じずに、導入の質問の仕方を考え、簡単な質問をする。さらに、オーセンティックな会話場面の創造するために、学生の人生経験や個人的な状況に基づいて言語モデルを提供する必要がある。具体的に、自己紹介を扱う授業では、学習者の学校および専門分野が何であることを指示文で示す。使用されているモデル文をよく理解してもらうために、著者は筑波大学の写真を使用することにする。

第二に、ステップ 1 で使用した言語構造に関連する質問をする。学習者が提示されたモデル文を使用し、それを自分の本物の状況に適応させながら応答する。学習者は答えに必要な単語を持っていない可能性があるため、英語で未習単語を追加しながら、モデル文の一部を再利用するように練習する。その際、新しい単語を単に提供するのではなく、「木村先生は経済を教えます。」などのように、文にその単語を入れ、全文を発言する。次に、学生がよく知っている先生の名前を使用し、もう一度質問をする。学習者は、内的文法 (internal grammar) の発達を確実にするために、全文で新しい単語を使用して答える。

第三に、学習者は互いに自律的に同じ質問し、パワーポイントに提示されている絵を参考にして答える。オンライン授業で 2 人以上の人は同時に発言する際に混乱状態になることを考慮にし、全員の学生に質問と回答の機会を与えるために、次のように指示を出す。まず、学生を指摘し、その学生に自分でクラスメイトを選択し、選択したクラスメイトに質問してもらい、次に、選択されたクラスメイトは質問に答え、別の学生を指摘し、その学生に質問する。

最後の練習として、Zoom のブレイクアウトルームの機能を使用し、学生を 2-3 人に分け、10 分で、簡単なインタビューをしてもらう。学生についての筑波大学新聞の記事を書くことを想像してもらい、入学したばかりの留学生にどのような質問をすることができるのかを確認し、留学生は現在どのような悩みや不安を抱えているかを聞かせてもらう。ブレイクアウトルームから戻ってきた学生に練習した会話を人前で発表してもらう。

### 4. まとめ

本稿は、ZOOM を用いたオンライン同期型の遠隔授業で神経言語学的なアプローチに基づいて作成された練習問題の導入の実践報告である。この練習を行なってきていくつかの効果がみられるようになった。まず、授業で設定された目標が達成でき、インタビューの練習できていない学生はいなかったことである。次に、皆の前で会話練習を行なうということに対しては、暗記してきたモデル会話通りではなく、自ら工夫しながら発表した場合、他の学生から賛嘆の拍手マークが出てくるなど、クラスの雰囲気がとても和やかなものになった。以上のように指導していったことで、学生は習った文法を活かし、実際に話ができるのだということがわかったことは大きいと思う。また、練習問題のテーマを学生に近い問題に設定した結果は、話すということに対する緊張が解れ、積極的に話すようになったのも成果の一つであろう。今後、明示的なおよび暗示的な指示の出し方や練習問題のテーマの設定などをさらに検討していくとともに、より効果的な指導方法を研究していきたい。

### 参考文献 (REFERENCES)

1. 高橋太郎 (1987) 「動詞 (その二)」 『教育国語』 第 89 号むぎ書房。
2. 渡邊万里子 (2019) 「フォーカス・オン・フォームに基づく文法運用能力測定結果—日本人英語学習者はコミュニケーションで文法知識を運用できるのか—」 『教職研究』 34 : 97-108.
3. Anderson, J. R. (1990) *Cognitive psychology and its implications* (3rd ed.) New York, NY: W.H. Freeman.
4. Germain, C., Netten, J. (2012) *A new paradigm for the learning of a second or foreign language: the neurolinguistic approach*. *Neuroeducation*, 1(1), 85-114.
5. Morgan-Short, K., Sanz, C., Steinhauer, K., Ullman, M. T. (2010) *Second language acquisition of gender agreement in explicit and implicit training conditions: An event-related potential study*. *Language Learning*, 60, 154-93.
6. Paradis, M. (2009) *Declarative and procedural determinants of second languages*. Amsterdam, Netherlands/Philadelphia, PA: John Benjamins.
7. Rastelli, S. (2018) *Neurolinguistics and second language teaching: A view from the crossroads*. *Second Language Research*, 34(1), 103-123.